CLOSE UP クローズアップ

“究極の芸能”に人生を注ぐ女性講談師

都城島津講演会にて（2009年11月）

「恥ずかしい生き方はせんとこと思います」。その言葉を大事に飲み込むかのように、きゅっと口を結んで笑う旭堂小二三（きょくどうこふみ）さん（34）。人生をかけるに値する芸能だとほれ込んで入った講談の世界で、「やればやるほど遠くなっていく」という大きな目標に向かって突っ走っている。

◇舞台俳優からの転身◇

高校時代に怪我でバスケットボール部入部を断念したころから、舞台への導線はひかれていた。誘われるがままに演劇部に入り、短大時代も友人の所属していた劇団を手伝う。「小さいころから創造することが好きだった」こともあり、卒業後はOL勤めと俳優業との二足のわらじで忙しくしていた。

いよいよ両立が難しくなり、本気で舞台に臨もうと会社を退職。講談には「芝居の勉強になる」と先輩に勧められて出合う。「滑舌が良くなると思って、素人を対象とした講談塾に入った。でもあまり真面目に通わず、不良塾生だった」

生半可な気持ちに火がついたのは、発表会の舞台を終えたときだった。客席の反応がダイレクトに返ってくることが衝撃的で、「これは面白い」と目覚めた。「伝え方でまったく違う作品になり、意図通りに伝われば一生お客さんの心に残るものになるかもしれない。生涯かけるに足る芸能だと思った」

◇一から修行◇

25歳で3代目旭堂小南陵（現 4代目旭堂南陵）に入門。まずは基礎となる読み物「修羅場読み」から徹底的に叩き込まれた。そして翌々月ぐらいから高座に上がり、実地稽古に臨む。約2年で年季が明けると、新作講談にも挑戦。1作目は、学生時代に勉強した幕末モノから新撰組の話で創作した。

大好きな映画も、それにまつわる話を題材に講談に仕立てて得意ネタとする。「身近な問題としてとらえてもらわなあかん」と「子どもの人権講談」にも力を入れる。「虐待やいじめ問題は他人事ではないということを、全部押し付けるのではなく、想像できる余地を残して伝えたい」

こういったオリジナルと並行し、古典もきちんと継承していく必要性も承知している。「いずれは弟子を取りたい」という思いも強く持つだけに、上方の講談界を背負う師匠への尊敬の念はやまない。「自分の気持ちや生き方に自信を持って30年、40年と年輪を重ねている師匠には、絶対に勝たれへん」

◇生き方が舞台に◇

江戸末期から明治にかけて全盛期を迎えた講談だが、戦後は衰退の一途をたどる。しかし、近年は落語などの伝統芸能への関心が高まる中、講談界も女性講談師の活躍などで活気付いている。「視覚的なものに頼りすぎていた時代がすぎ、観客の想像力を頼りにする芸が求められている」と分析する。

気軽に講談に触れられる機会をつくる動きも活発だ。「アニメのガンダムやジャズ、競馬など独創的な題材による創作講談への取り組みが上方は江戸よりも盛ん」という。しかし、落語に比べると公演数はまだまだ少なく、定席（常設の寄席）もない。「いずれは講談師の数を増やして定席も作らなくては。人に頼るのではなく何とか自分でできるようにならなあかん」

道のりは長いが、講談界の発展や自身の芸の研鑽に必要なことは自覚している。「口先だけでいいことを言っていても、行動が伴っていなかったり後ろめたい気持ちがあったりしたら、見事に舞台に出る。自分と向き合い、嘘のない生き方をしたい」。講談という芸を、人生そのものととらえて高みに向けて邁進する。

（文・江中咲紀／表紙写真・高島悠介）

プロフィール

講談師

旭堂（きょくどう） 小二三（こふみ） さん

1975年、大阪府八尾市生まれ。1996年から舞台活動を始め、2001年7月に旭堂小南陵に入門。奇数月（3月は9日）に「旭堂小二三の講談会だけどいろいろやってみよう」（ワッハ上方）、偶数月に「亭―1グランプリ」（同）のほか、「梅田座」（サンケイリビング大阪教室）、「武庫川座」（武庫川お好み焼きこもも）などの定期講談会などに出演。
ホームページ「旭堂小二三のおうち」
http://www.kawachi.zaq.ne.jp/kofumi